「無漏無生」の無生とは、現象論の立場から視れば萬有は生滅無常のものなれども、本體論より視れば本來無生無滅のものであるによつていふ。

*むろ　吹雪にまじる勤行の鈴の聲をしるべにて室の戸に案内すれば（井筒）

〔室〕こもる義。房をいふ。庵室。僧房。

*むろ　燒物はむろの酢煎（すいり）（脊庚申）

傾城といふものにだまし賣られて、室の津の室君と言はれしを（用明天皇）

〔室〕播磨國揖保郡室津をいふ。「むろの酢煎」は室鰺（むろあぢ）の酢煎をいふ。和漢三才圖會に、「室鰺。多出二於播州室津一故名レ之、形似レ鰺而略圓、有二白刺一眼大、各月作レ鮓、東海亦多出、味脆不レ佳爲二下品一」。「室君」とは播州室津の游君即ち遊女をいふ。

むろまちもやう　小袖の縫は將軍の御物好（ものずき）。俗にいふ室町模樣（女夫池）

〔室町模樣〕金銀錦繍を以て服裝を飾り、その模樣派手であつて、室町時代上流間に流行したばさら風なるをいふ。

め

*めいしよく　池田の宿の俵屋の長が家の名色熊野（ゆや）は京より戻りしとて（本領曾我）

〔名色〕名妓。人に知られた名高い美妓。

*めいどのとり　やよや待てなれよ冥土の鳥ならば、死出の山路に關据ゑて（會稽山）　げに時鳥（ほとゝぎす）は冥途の鳥、しでの田長を啼くとかや（小栗判官）

〔冥土鳥〕不如歸（ほとゝぎす）をいふ。「閻魔卒（えんまそつ）三魂（さんこん）を縛して云云」を見よ。俳諧歲時記栞草に、「冥途の鳥。ほとゝぎすの異名」。生玉心中に「我は初音か時鳥、冥途の友と鳴き連れて」とあるも、時鳥を冥土の鳥といふによつて、時鳥は冥土に行く我が友の意にいうたのである。また本朝三國志に、「君の御供の冥途の鳥、卯の花縅の腹巻に」とあるは、冥途まで君の御供といふに冥土の鳥をいひかけ、不如歸は卯花の咲く卯月の頃より啼けば、卯の花縅にいひつゞけたのであつて、俊成の歌にも、「名に立てる時の鳥とやいへしかど、卯月きぬとて初音鳴くらん」と見えてゐる。

名物（めいぶつ）の鰻（うなぎ）　地名部「沼津」を見よ。

*めいめいてう　一體に二つの頭、餌を爭ひ食ひあふ有樣、命々鳥の類かや（女夫池）　赤栴檀の水風呂桶、めいめい鳥の雛、孔子の自筆の論語・大學（大織冠）

〔命命鳥〕一身二頭の鳥の名。延寶版・節用集・幾部、耆婆鳥の註に、「法華には云二命々一、阿彌陀經雜寶藏經等には云二共命一、一身二頭鳥也、耆婆梵語也」。和漢三才圖會・卷四十四、山禽類に、「命命鳥。雜寶藏經云、昔雪山中有二共命鳥一、一身二頭、一頭常食二美果一、欲レ使二身得一レ安穩一、一頭便生二嫉妬之心一、而作二是言一、彼常云、何食二好美果一、我不二曾得一、卽取二毒果一食レ之、便二頭倶死、云々」、とありて命命鳥の事が載せてある。武道傳來記（貞享四年刊）卷八、惜しや前髮箱根山颪の條に、「いつの程にか色ある兄弟の契約、不斷妹脊の如く姿を二子山にならべ、愚かに命命鳥の宿木に夜を籠め」。

めいもん　鹿毛の駒に縛り乘せ、命門の筋を切つて心の臟をつんざき、刺殺して棄て候へば（佐佐木）　浮中沈の三候も心肝腎も命門も、右にあるやら左やら（冷泉節）

〔命門〕漢方の語。背部正中線の内第三腰椎の棘狀突起の下にあるともいひ、また男にありては右腎をいひ、女にありては左腎をいふともいふ。新刊勿聽子俗解八十一難經（元和十三年古活字版）に、「萬物所レ生必有二其原一、夫人生氣之原者腎間動氣是也、腎之動脈在二足內踝骨上・動脈陷中一、名曰二太谿一、穴是足少陰腎之經也、男子以二右腎一爲二命門一、女子以二左腎一爲二命門一、主二生死之要一故謂二命門脈一、此係二生氣之原一、藏府經絡之根本、通二呼吸一之門、作二三焦之原一云云」。傾城太太神樂（寶永二年刊）卷一、風流の目利の條に、「胡顏の花のもろきを見ては、命門の脈をうかがひ、烏鳴のわるきを聞いてはとなりのお婆をあはれむべし」。

（和漢三才圖會所載）

*めいよ　たつた今但馬の湯入を乘せて通る駕籠舁がめいよな事を言ひました（大經師）　お山は口へも寄せなんだが、めいよな、鰻といふものは食へば食ふ程お山が食ひたうなつてくる（氷朔日）　青梅好（す）きやらば惡阻（つはり）でござろ、めいよな不思議や中戸のかれごとが、はや七月とぞ答へける（百日曾我）　三塔に隱れなき長刀の達者と、僧正坊に授かりし打物のめいよと、甲乙分目の戰は、巣立の鷲の若鳥と、深山を出でし荒熊が、野邊に爭ふ如くにて（孕常盤）

奇怪。不思議。按じるに「めいよ」は名譽である。「ほまれ」の義より轉じて、奇妙、かはつたこと、奇怪、不思議の意にいふ。「めいよ」は「めいよう」「めんよう」などと訛つてもいふ。西鶴撰・諸國咄（一名大下馬）卷一、大晦日は合はぬ算用の條に、「小判もまづ御仕舞ひ候へと集むるに、拾兩ありし內一兩足らず、座中居直り袖などふるひ、前後を見れども愈（いよいよ）無いにきはまりける、主人の申すは、その內一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覺え違ひといふ、ただ今までたしか拾兩見えしにめいようの事ぞかし、兎角は面面（めいめい）の身晴と上座から帶を解けば」。伊賀越道中双六（淨瑠璃）伏見の段に、「何と晝の洗ひ藥でさつぱりとよからうがの、イヤさしてかはつた事も、ハテめんような、アノ藥でよい筈ぢやが」。「めんよう」を面天または面妖などと書くは當字である。

めうかくきやう　等覺深位の時鳥（ほとゝぎす）はめうかくきやうの峰に鳴き（百日曾我）

〔妙覺究竟〕「妙覺」とは佛果の無上正覺をいふ。「究竟」とは事理の至極をいひ、究は理の極、竟は事の極をいふ。

めうたい　一字一字に佛の妙諦そはりたり（三世相）

〔妙諦〕妙は不思議靈妙の義、諦は眞如の義である。

めうらくだいし　妙樂大師の御釋に、諸經所讚多在彌陀緣深厚故と述べ給ふ（百日曾我）

〔妙樂大師〕天台宗第六祖湛然をいふ、支那常州妙樂寺に在住してゐたので妙樂大師といひ、また晉陵荊溪にもゐたので荊溪大師ともいふ、摩訶止觀輔行など撰述頗る多い、唐・興元元年十二月寂す、壽七十一。

めかい 「めかひ」を見よ。

めがかり 都の富士を動かさずここに引寄せ、目がかりの里の賤屋も植込みの木の間に見せて（閑八州）

〔目懸〕目に懸ること。目障り。

*__めがたき__ めがたきといひ家來の敵（三世相） 目前の女敵見遁しにならうか（薩摩歌） 土産を遣はし氣を付けても女敵をも得討たず、きかぬ顏する腰拔の彦九郎（堀川波鼓）

〔女敵〕己が妻と密通した姦夫をいふ。（元祿頃から享保にかけて女敵討が往往あつた。巢林子作の堀川波鼓、鑓權三重帷子はこれを書いたものである。思ふに己が妻が間男したからとて、その姦婦姦夫の行方を捜索して斬棄てしまふことは、現今の思想から視ればいかがはしいことでもあり、こんな破綻は昔も身分の高い人には無かつた。）

*__めかど__ 目かどの強い人ちやの、毎年の事でもこちはすきと覺えぬ（大經師） 祐經元より目角強く（會稽山） 足はどれても目角は強き袴肩衣（壽門松）

〔目角〕和訓栞に「めかど。眦をよめり、目所記也と注せり」とある。「目角強い」とは、眼識の鋭いをいふ。

めかひ さりとは慘き殿樣や、目かひの見えぬ女の身、科あらば一思ひに殺しやうもあるべきに（百合若）

〔目慳〕卽ち目の價値の義。目のはたらき。「かひ」の條を見よ。伊賀越道中雙六（淨瑠璃）伏見の段に、「目かひも見えぬ志津馬樣に慳い辛い大惡人、天道樣の明かなお目にはこれがかからぬか」。

めかり ええ物貰ひでも目かりを利かしや（夕霧） 何程不孝になるとても半時や一時のめかりはない（川中島） あたどんな念佛、こんな時はめかり利かして延ばしたがよいわいの（宵庚申）

〔めかり〕の略であらう。「めり」は減で音の下りを云ひ、「かり」は加で音の上りを云ふ、以て音の上下の調子をいひ、轉じてほどあひ・氣轉・氣兼の意にいふ。紀海音撰・八百屋お七・上卷に、「めかりのない、帶解く事も時によるし。」染模樣妹背門松（淨瑠璃）質屋の段に、「今いなすもどうやら氣懸り、今一日二日にめかりもあるまい、春早早迎にござれ」。今樣二十四孝・寶永六年刊）卷之四に、「人中にてつべこべと物さへいへば利發者と覺え、もものじりしてゐる人にめかりもきかず長口上をこね廻し」。「めかりをきかず」とは、加減を利かず、氣轉をはたらかすの意。

*__めぐ__ あたる物を幸ひに、打ちめぐ打ち破る（嫗山姥）

「まぐ」（曲）の轉であらう。毀つ。こはす。（この語現今も中國地方などで用ひられ、他動詞なる時はカ行四段活用、自動詞なる時はカ行下二段活用である。）俚言集覽に、「めぐ。ト濁、打毀つを云、又へク心にも云、メとへと通ず」。和訓栞に、「めげる。俗語也。曲るの轉ぜるなるべし、又げるノ反ぐ、人をめぐなど俗にいふめり、九州四國にてそこねる意に凡ていへり」。現今東京地方で、貧けてへこむを「めげる」といふも曲げる義である。

めぐしひたす 當今世だぶんしの學に長じ給ひ、民を以て天とすとめぐしひたし給ひければ（用明天皇）

惠み憫す。「めぐし」は神代紀に「憐愛」をよんである、惠むの義である。

めくらぶね 舟筏を二行に列れ、めくら船に竹束つけ、貝鉦鳴し攻鼓水底を轟かし（百合若）

〔盲船〕和漢船用集に、「後太平記に盲船竹圍板囊といへり、此舟尤兵家水軍船戰の祕事とす」と見えてゐる。蓋し周圍を板や竹で塞ぎ、進退自由になる裝置をした軍船。

めぐろ 大きな鏡にめぐろそへてすゑられた（夕霧）

〔目黑〕浪花方言（文政二年成、寫本）に、「目黑。小まぐろ魚なり」。（ここの文に「大きな鏡」とあるは、大きな鏡餅のこと。）

めざし 和布まじりのめざしなす、鹽屋が軒に竹見えて（田世景清）

〔目刺〕鰯など數多、目に藁又は串を通して乾したもの。巢林子のこの文、目刺をして、和布などと共に竹に吊し、鹽屋の軒に乾してある漁村の風景をいうたのである。

めざす 夕立頻る雷神、目ざすも知らぬ松蔭に（今宮）

〔目刺〕目を刺す。ここの文は、人が我が目を刺すも知らぬ、卽ち一寸先も見えぬ闇をいふ。太平記卷三、陶山小見山夜討の條に、「其夜は九月晦日のことなれば、目指すとも知らざる暗き夜に、風雨烈しく吹いて、面を向くべきやうもなかりけるに」、とある「目指す」も目を刺す意である。俚言集覽に、「目ざすもしらぬ闇。（太平記評判）目を指もしらぬ闇の夜、（後訓栞）空めさすもなくくもりてと見ゆ」。

めさましぐさ 一吹ついで燻らする目覺草は服部の、八聲も鐘もかすみ行く（雪女）

〔目覺草〕煙草の異名。

めじろ 丹後の生鰯上方にもめじろと申してあるげなれど（浦島）

〔眼白〕和漢三才圖會卷四十九、魚類、鰯の條に、「一尺許者名二眼白一」。越谷秀眞編・物類稱呼卷二、動物部、鰯の條に、「一尺程なるを西國にて目白と云」。

*__めせきがさ__ 竹の紋つく道行の本を召せ召せ目せき笠二枚給 憚りながらあの興にめせき編笠、義經がこれ浪人の乘物と（源義經）

〔目狹笠〕「めせき編笠」もいひ、闌笠または篠笠の編目狹い笠。松の葉（元祿十六年刊）卷二、こむらさきの唄に、「うきよをしのぶ目せき笠、雨はふらいでこひがふる」。和訓栞に「めせき。闌笠篠笠などにいへり、目狹の義なり」。

めだう 對の屋の馬道を忍び入りにけり（女夫池）

〔馬道〕横に厚い板を敷き渡して廊の如く通行するやうにしたもの。必要に應じては奥まで馬を引入れる道とするから馬道といふ。後には長廊下をいふやうになつた。（一說に馬道は「まどほし」、〔間通〕の約で、殿中の多くの間を貫通した板敷の稱であるといふ。）

目叩き膽（めたたきなきも） 日叩き膽人の鮨、からだは水に冷し物（鵲田川）

瞬き（目叩きの義）をして食ふ程辛酸のきき過ぎた膽。

めだれがほ わが戀かなはぬ腹立ちに、めだれ顏のわんざんはいやはや人でなし（以日波）

〔目垂顏〕まだるく見える顏付の意より轉じて、謀くなくづうづうしいことにいふ。平家物語・卷一、鹿興振に、「山門の大衆は目だりがほしけりなど京童の申さんこと後日の靡にや候はんずらん」。謠曲・安宅に、「めだれ顏の振舞は臆病の至りか」。謠曲・烏帽子折に、「盜人よ目だれ顏なる夜討はするとも我には叶はじものを」。「扇の芝（古淨瑠璃）第五に、「ここな下郎めめだれがほは推參なり」。

*めづ　おのれ少しの慾にめでてよう訴人し居つたな（大經師）
愛の義。ここの文意は愛慾に心を奪はれるの義に云うたのである。

*めつかふ　小判と云ふもの近づきになつておけと、めつかふに投げつくろ（女腹切）　めつかふほうど食はする（生玉）
「まつかふ」（眞甲）の轉訛。額の眞中。

めつき・しやつき　犢牛の二匹連れ鐵杖提げ、三熊の分身隱れなき、めつきしやつきといふ早業（振袖始）
〔滅鬼・積鬼〕地獄の鬼卒であつて、牛頭阿旁をいふ。和訓栞に、「めつきしやつきの俗語は牛頭阿旁を譯す」。

*めつきやく　我が身の上のめつきやくあり（女殺油地獄）
〔滅却〕破滅。玉篇・卷五にも「酒家滅却」と見えてゐる。

めつぽふふたい　言ひたいことを言ふ故に、めつぽふふたいの玉と名を取つた女子ぢや（弘徽殿）
面向不背の玉（その條を見よ）と滅法譃代の玉とをいひかけた洒落である。譃代奉公する滅法（めちやくちや）な玉の意。

*めて　しやんとゆんでの腹に突立てめてへくはらりと引廻し（宵庚申）
〔馬手〕「ゆんで」（弓手）に對する語。右手をいひ、馬の手綱を持つ方の手の義であるといふ。

めなご　父等母等に爺媼息災、めなご小悴產みの儘なる餓鬼十二疋（雪女）
「女の子」の轉。女のわらは。女子。

*めなみ　便りなぎさに立つ女波（薩摩歌）
〔女波〕波の打つに高くなり低くなる、その高き方を男波といひ、低き方を女波といふ。和訓栞に、「めなみをなみ。波のうつに一たびは高く、一たびは卑し、よて男女を分てるなり」。

*めぬき　放目貫の性よしも（女腹切）
〔目貫〕刀柄の目釘の邊に嵌める飾金具。（元は目貫・目釘は一物）「放目貫」は武家名目抄・刀劒部に「按、目貫打て其上に卷固むべきを此儘卷かざるを放目貫と云、例式の腰刀は放目貫にて」。儀式用の太刀・七首作りの目貫は柄絲を卷かないで露出するから、其目貫を放目貫といひ、金質彫刻の良いのが多い。

*めのと　百島太夫と申すめのとを具し（用明天皇）
妻の弟の義。妻の弟は子をよく守りくれるより轉じて、總て補佐する人をいふ。傅。守役。

*めまぜ　うろたへ者と睨付け目まぜで知らすれば（女腹切）
〔目交〕めくばせ。眴。

*めやす　この月の三日限りに家渡すか銀立つるか、返事次第に五日には目安上げる（大經師）　目安附けるも樗はぬが（大經師）
〔目安〕目で見てすぐ知れ易く簡條書にした文書。目安書の公事訴訟文書。「目安上げる」または「目安附ける」とは、告訴狀を公儀（法廷）に差出すをいふ。

*めゆひ　めゆひの直垂五色の絲にて菊綴し（最明寺殿）
〔目結しぼり染〕。

めら　うらが樣なめら、歌連歌にべる都人夢にも見やしめすまい（女護島）
「めらう」（女郎）の「う」の略された語。現今鹿兒島地方にて女のことを「めら」といふ。「めらう」は女郎と書けども、「めわらは」（女童）の轉語である。

めらん　忍ぶ戀路をせきだいの、女蘭男蘭は呂州の姿（生玉）
〔女蘭〕漢名に漳蘭といひ、蘭の一種である。飯沼長順撰・草木圖說・前篇卷十八に、「メラン（漳蘭）。建蘭に比すれば葉幅微く濶うして柔軟、葉末垂れ易し、花形大異なし」。

*めをと　われと和女はめをと星、必らず添はう（曾根崎）　片潮・諸潮・めをと潮・投げ潮（最明寺殿）
〔女夫〕妻夫。夫婦。「めをと星」とは、織女星と牽牛星。「めをと潮」とは、女波男波の潮。「めをと池」「めをと塚」は地名部を見よ。

*めんかうふはい　中にも面向不背の玉、七寶七重の箱の中、君を始め拜したる者一人も候はず、抑もこの玉と申すは赤栴檀のみそぎにて、五寸の釋迦の尊像玉の中にましまし、何方より拜しても同じ面に向ふとは申傳へ候へども、昔より誰ありて箱を開き拜したると申すこと候はず（大織冠）　めんかうふはいの例にまかせ南都興福寺の寶藏にこめらるゐ（西王母）
〔面向不背〕面向不背の玉をいふ。謠曲・海人に、「花原磬、泗濱石、面向不背の玉」と見え、また「玉中に釋迦の像ましまし、いづかたより拜み奉れども同じ面なるによつて、おもてをむかふにそむかずと書いて面向不背の珠と申候」。和訓栞に、「めんかうふはい。面向不背と書きならへり、海人水府に入て玉を取り身を割て藏せしといふは允恭四年記に本づき、唐書に西賈胡得三美珠一割レ身而藏レ之とあるに據なるべし」。

*めんざう　この上は搜して鼓を取れやとてめんざうに押入りける（天鼓）
〔眠藏〕佛家の寢所をいふ。謠曲・熊坂に、「お休みあれや御僧達、われもまどろまんさらばと、眠藏に入るよと見えつるが」。

めんどりば　さて山の手は都勢、垣楯持楯めんどりばに衝並べ（津戸三郎）
〔雌鳥羽〕雌鳥は左翼が右翼を掩ひ重つてゐる、よつて以て右の方から順次に重ね行くことにいふ。和訓栞に、「めとりば。雌鳥羽の義也、鳥之翼右掩左雄、左掩右雌と見えたり、俗にめんどりばともいへり」。平家物語に、「楯をめんどりばにつき並べ」と見え、好色五人女（貞享三年刊）卷之二に、「秋のはじめの七日織女に借小袖とて、いまだ仕立ててより一度もめしもせぬを色七つめんどりばにかさね」。

めんないちどり　腰の手拭引絞り、めんない千鳥百千鳥（冥途飛脚）
「めないちどり」（目無千鳥）が普便によつて擬音「んに」の增加した語である。小兒等相集り、其中の一人目がくしをなし、他の者どもを捕へようとして追ふ遊戯である。「目無しどちのきの雀」とも云うた、雀も千鳥も打拂れて遊ぶものなるよりいうたものである。浪花聞書に、「めんないちどり。兒戯目かくしなり」。福富草紙に、「みちすがら目無しどちのきの雀、あそぶわらべの手さし指さして笑ふ。伊賀越道中雙六（淨瑠璃）伏見の段に、「始終聞居る林左衞門詞の五音心得ずと仰上つて差覗くを、ちやと兩手でめんない千鳥、アアコリヤコリヤコリヤ何とする目が見えぬわいやい」。冥途飛脚のこの文は、面縛のことに云うたのである。

めんぺき 九年面壁達磨大師の教を受け(孫靜)
〔面壁〕壁に面して坐禪するをいふ。達磨大師は嵩山の少林寺に住し、壁に面して坐禪すること九年、その間一語をも發しなかつたといふ。

***めんめん** 俵をかされて面面に樂しうなるこそ目出度けれ(松風) 入子鉢の様なめんめんの子供の世話ばかりやきならず(女殺) 戀のめんめん稼ぎやと、ばらばら立つてぞ入りにける(淀鯉) いはばめんめん自害とも、心中の外の心中ぞや(卯月潤色)
〔面面〕めいめい。各人。各自。「めんめん稼」とは、各人稼ぐこと。「めんめん自害」とは各自盡くの自殺。

も

もうはう 毛寶は龜に乘り(國性爺後日)
〔毛寶〕晉書卷中に「晉毛寶字碩眞、滎陽陽武人、進征虜將軍豫州刺史、與西陽太守樊峻、以萬人守邾城、石虎遣二萬騎攻之、城陷、寶等率左右突圍出、赴江死者六千人、寶亦溺死、初寶在武昌、軍人有於市買得一白龜長四五寸、養之、漸大放諸江中、邾城之敗、養龜人被餌持刀、自投於水中、如負擔石上、視之乃先所養白龜長五六尺、送至東岸、遂得免焉」。この文に據れば、龜に乘つたのは毛寶ではなくて、一軍人である。

***もかう** 三間一の軒に紅のもかうを張りて御顏をかくし(天智天皇)
〔帽額〕御簾の上に横に張る帛で、水引幕の類であつて、それに窠の紋を散し染めにしてある。(序云、窠の紋繪は窠より出たといふ說と、瓜核より出だといふ說がある。按じるに窠の模樣は佛像傳來と共に輸入した模樣の變化したのであらう、印度古美術中に窠の模樣に似たのがある)。

***もがり** 門の戸明くれば、德兵衛もがりの蔭に隱れしを(重井筒) 紺屋のもがり劔の山、先には死出の大和橋(今宮)
竹の枝を拋いで立て並べたものをいひ、布をその拋き枝に懸けて乾かす。紺屋の物干。蓋し「もがり」は「もぎ」(拋で曲りの義より轉じたもの)の延びた語で、逆茂木を「さかもがり」といふの類である。壞遊笑覽に「もがりは物を懸けて乾しなどする故、烏帽子折などは用あるなり、また家のかこひとす、今は紺かきなどの染物の干場に作るをのみもがりといふ、その造りやう昔と變れるはかこひのかたの用ならねばなり、近くは貞享頃の繪に染物を張りて乾すところの竹もがり、垣の如くたてたる竹に、絹どもは横に幕をひきたるやうに張りて乾したり」。

〔りがも〕

(人倫訓蒙圖彙所載)

***もがり** 人賣と見た、もがりと見た(女腹切) 彦介めさ程の疵ではなけれども、ねだつてかれにするもがりとはかがみにかけたこと(壽門松) 慾面の繼父めが年切增のもがりごと(女腹切)
「まがり」(曲)の轉、曲者の義。おどし又は欺いて金錢を强請ること、又その人、色道大鑑(延寶年中成、寫本)に「もがりと云は非道を元として言分をこしらへ、利を得るたくみなどする者をかくいふ也」。但言集覽に「武藏國府壘の邊四辻の所を四モガリと云、モガリはマガリ也、曲者をモガリ者と云」。この語は動詞(ラ行四段活用)にも用ゐる。壽門松(巢林子作)に「七十になる淨閑がもがられたといふ外聞わるさ」と見え、卯月潤色(巢林子作)に「着衣裳までもがり取り家一はいに荒風」と見えてゐる。

***もぎどう** 彼奴は木で鼻もぎどう者、ただは言ふまじ(冥途飛脚) 佐用姫はもてもぎどうな、討たれまいやら討たれうやら、今一度言葉もかはせぬ夫の心の慘らしや(用明天皇) 敢妙來れと、手を引いて障子引立て入り給へば、扨ももぎどう手ばしかい妹の初戀(日本武尊)
「もぎどり」(拋取。「もぎ」は「まがり」(曲)が「もがり」と轉じて約つた語)の音便か。莫義道、無義道などの字が當てゐる。非道。邪惡。不愛想。容赦なく一輪の意にいふ。等躬編「信夫摺」(元祿元年刊)、立羽不角の句に「一哲に秋を惜まぬ野守哉」とあつて、「一哲」に「モギドヲ」と振假名が附してある。一哲は一輪の音借字である。分里艷行脚(正德六年刊)三之卷に「かの配分もとらず無義道に立つて行けば」とあつて、「無義道」に「もぎどう」と振假名が附けてある。「もぎどう」の語源には諸說がある。伴信友の說に「運歩色葉に挑筒とかけり、双六の定に敵の筒を挑ぎとることあるにたとへたる也、今も此俗語をもぎどうと云處もあり。蹉草(元祿十四年刊)に、「無義道(もぎどう)だらは誤」。俳言集覽に「もぎどう。假字眞字未詳、倭字通例書)もぎどう、無義道、注・俗言也、愚按文字不穩」。「木で鼻もぎどう者」をも見よ。

もくそはんきやん とくれきの城攻取られ、柱と頼みしもくそはんきやんも行方知らず(三國志)
牧司判官である。朝鮮にて州の長官を牧司と云うた。牧司は我が國では判官のやうな職であるから牧司判官と云うたのである。我が國で牧司と云うたのは朝鮮晋州牧司をのみ云うたものである。

もくば おりや遊びにや來させぬ、太四郎樣からせせんよ樣へ文持つて來ました、それそれが木馬のもと(酒呑童子) 柱を横に渡して足に石を括付け木馬とやらに乘せられ(酒呑童子)
〔木馬〕木を馬の背のやうに削つて渡し、人をその上に跨がらせ、兩足に重き石を括下げて拷問呵責する具。十訓抄・中卷、可ㇾ專ㇾ思慮事の條に、伏見修理大夫俊綱が成方といふ笛吹の所持せる笛がほしさに呵責することを記して「雜色所へくだして木馬に乘せんとする間云云」と見えてゐる。月堂集・十之卷に「安右衛門。右は當四月(享保三年)國元へ被ㇾ送候由、大坂にて水ぜめ木馬ぜめ、さまざまのせめにあひ候へ共おち不申候由」と見えてゐる。

***もくらんぢ** (最明寺殿)
〔木蘭地〕「むくらんぢ」ともいふ、黃赤に少し黑みを帶びた色地。梅谷鴻「僧尼令の義解」に、「木蘭地は黃櫟也」。安齋隨筆に、「梅の異名を木蘭といふ、木にて素よりきこと蘭の如くなればなり」。